

## ■ 1970年代のYWV

部史編纂委員長 木村（17期）

部史編纂委員会では1957年のYWVの創設以来63年にわたる活動の記録（文書や写真など）を収集し、インターネットの専用サイト「歴史資料館」に保存・公開する活動を進めています。今回はこれらの資料に基づき、私が在籍した1970年代のYWVの姿を振り返ってみたいと思います。

この10年を概括すると、二つの注目点があります。

まず一つは、「積雪期の山への活動拡大と、結果として発生させてしまった死亡事故の反省に基づく活動方向の大幅な転換」ということになろうかと思えます。1968年になえな小屋が建設され、この地域を対象に1970年12月には第1回冬山訓練が行われました。この時は笹ヶ峰牧場まで行って幕営するという初歩的なものでしたが、以後毎年末に冬山訓練が1975年まで行われ、徐々にレベルアップして火打山や三田原山に登頂するまでになっていました。この間PWでも積雪期・残雪期の山に登られるようになり、また沢登りも行われるなど、それまでのYWVの活動とは一線を画すような領域に足を踏み込んだ時期でした。そのような中、1976年のGWに奥穂高岳で当時2年生の徳重君が滑落死するという痛ましい事故が発生しました。その経緯、対応、発生原因究明、及びこれらを踏まえたYWV運営方針の転換については、歴史資料館内の「滑落事故報告書（昭和51年5月奥穂高岳）」に詳細が述べられていますので、ご一読をお勧めします。（歴史資料館内の文書閲覧方法については、3月8日発信のOB会メルマガに記載しております）

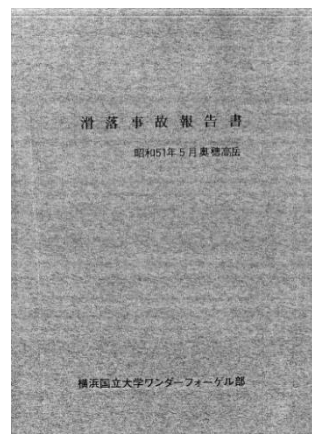
もう一つの注目点は、「最大の活動期間である夏に、合宿を行うかPWで対応するか」の論争がこの年代前半に続いたことです。創部以来YWVは人気のクラブであるが故に常に大所帯で、様々な考えの人を抱えた集団でした。1960年代には、山派と里派の対立から里派の大量退部により、活動領域が山中心に移って行きましたが、1970年代に入ると「夏にはクラブ一体となった合宿を行うべきだ」「いや各自自由な山行を楽しみたい」との論争が行われるようになりました。結果として1971年・73年は夏合宿を行い、72年・74年・75年は夏の大規模PWが行われました。

こうした中で上記奥穂高岳での死亡事故が発生して、当時の執行部（18期）はそれまでのクラブ運営体制を見直し、

- (1)冬山など先鋭的な活動は追い求めない。（禁止する）
  - (2)クラブとしての一体感醸成のために「自然と人間の関りを考える」とのテーマを掲げ、4つの班に分かれて年間活動を行う。
  - (3)部内の引き締めを図るため、上記テーマに基づき夏合宿を行う。
- との方針を打ち出し、以後これが続くことになります。



1973年12月冬山訓練 火打山頂にて



滑落事故報告書